

カポージェイ小説の詩的特質(2) “(-)like”を用いた直喩表現の考察一

著者	大園 弘
雑誌名	社会文化研究所紀要
号	76
ページ	1-25
発行年	2015-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000578/



カポーティ小説の詩的特質 (2) —“(-)like”を用いた直喩表現の考察—

大園 弘

はじめに

カポーティ小説の文体上の特徴は、その詩的雰囲気にあることが多くの読者により認識されている。だが、その詩的雰囲気がいかにして作り出され、いかなる効果を出しているかについては、ほとんど顧みられることなく現在に至っている。そのために筆者は、詩が韻 (rhyme) と律 (rhythm) を重要視する文学形式であるという認識に基づき、前稿においてカポーティの散文にみられる押韻形式の多様性と押韻効果の検証を試みた。^① 考察の結果、カポーティの散文が詩的であると言われる根拠の一つに、押韻形式が深く関わっていることを作品から抽出した数多くの事例とその分析をおして明らかにすることができた。

しかしながら、押韻による詩的雰囲気の創出は、カポーティの散文を詩的に響かせている様々な要因のうちの一つに過ぎないと見做すのが自然であろう。では、カポーティの散文を詩的にしている別の要素は何であろうか。

本稿では「直喩 (simile)」や「隠喩 (metaphor)」を中心とする修辞法の多用が、カポーティの散文を詩的にしている別の要因であるとの仮説を基に、まずは比喩標識^② “like” を含む直喩表現に的を絞り、この仮説を検証する。考察の対象とするのは処女中編小説 *Other Voices, Other Rooms* (1948 以下、*Other Voices* と略す) である。第 I 節では直喩や隠喩が詩的雰囲気の生成に関わっているという仮説を提示し、併せて本稿が考察の基準とする直喩の性質を定義する。第 II 節では接尾辞 “-like” を含む語句の直喩表現に焦点を絞り、データの分析と考察を試みる。第 III 節では同じく “like” (前置詞・接続詞) を含む直喩表現についてデータの分析と考察を試みる。そして第 IV 節ではすべての直喩表現のうち極めて印象的な 3 事例について、その詩

的効果を考察する。以上の各節をもって、前稿に続き、カポーティ小説における詩的特質の新たな一面とその実態を明らかにすることが本稿の目的である。なお、“(as) ~ as” や “as if (/ as though)” などの比喩標識を備えた直喩表現については、稿を改めて論じることとなる。

I 仮説および直喩の定義

詩は、韻律と不可分の関係にあるという点で、小説（散文）とは大いに異なる。このことは自明であろう。であれば、小説に韻や律を意識して創作されたと認定できる表現が多ければ多いほど、その小説は「詩的」であると言える。

筆者は前稿でカポーティの小説から韻や律が認められる数多くの事例（英文）の考察をとおして、カポーティの文体が詩的であることの一つの要因として、韻と律が深く関係していることを明らかにしたが、詩に特有の言語的・文体的要因は、もちろん韻律だけではない。リーチら（G.N. Leech et al.）によると、散文の美的効果が言語そのものではなく、「言語を通して表現される他の要素（人物・テーマ・議論など）にある場合が多い」のに対し、詩の美的効果は「言語コードを創造的に操作することと深く結びついている」。⁽³⁾ リーチらの言う「言語コードの創造的操作」とは韻律と比喩を指しており、これらの要素が詩的言語と、散文に代表される日常言語とを区別するものとされている。

リーチらのこの捉え方に基づけば、韻律同様、比喩もまた散文が詩的であるかどうかの判断基準となりうる。もちろん、近年注目を集めている認知言語学が主張するところでは、隠喩が詩や詩人の独占物ではなく、「きわめて日常的にみられるものであり、われわれはそれを無意識かつ自動的に使用している」⁽⁴⁾ のは事実であろう。また、散文（小説）においても隠喩や直喩などの比喩表現には頻繁に出くわす。だが、詩と散文ではその使用頻度に歴然とした差があるのもまた事実であり、比喩表現が多ければ多いほど散文の詩的雰囲気が高まると考えることができる。すなわち、散文においては比喩表現の使用頻度と「詩的度」に相関関係があるという仮説が成り立つ。

むしろ、比喩表現の使用頻度を散文の「詩的度」を判断する基準とする場合、まずは本稿が考察の基準とする「直喩」そのものを予め明確に定義しておく必要がある。

佐藤信夫によれば、直喩とは指標（比喩標識）を伴う表現形式である⁽⁵⁾。英語では

“like”, “as”, “as if (/ as though)”などがこれにあたる。もちろん、これらの指標を含むフレーズがすべて直喩だというわけではない。(1-a)の例に見るように、喩えられる被喩辞と喩える喩辞との関係に類似性が認められるような単なる比較(喩え)は、直喩と見做すことはできない。⁽⁶⁾

(1-a) ...; in certain way *he*[Little Sunshine] was like *Jesus Fever*. ...⁽⁷⁾ (下線・イタリック 筆者)

「ある意味で、彼 [リトル・サンシャイン] はジーザス・フィーバーのようだった。」

(1-a)では、文意から被喩辞(“*he*[Little Sunshine]”)と喩辞(“*Jesus Fever*”)との間に明らかに類似性が前提とされているために、直喩とは見做せない。これに対して、(1-b)の被喩辞(“*The night sleep*”)と喩辞(“*enemy*”)との間には類似性は認められず、両者の結びつきは意外かつ新鮮ですらある。佐藤は後者のようなケースを直喩と見做しており、本稿でも佐藤に倣い、被喩辞と喩辞との関係が類似的か否かを比喩標識“like”を含む表現が直喩であるか否かの判断基準とする。

(1-b) *The night sleep* was like *an enemy*; ... (p. 164. 下線・イタリック 筆者)

「その夜の眠りは敵のようだった。」

また、事例の考察に際し、本稿では直喩表現の際立ちと印象深さの基準として、内海 彰による隠喩の詩的度の3要因を参考にする。カポーティの散文が詩的であることを検証するという本稿の目的からすれば、内海が提唱する隠喩の詩的度の尺度を直喩の詩的度に読み替えたとしてもさほどの問題はないと思われるからである。

内海は認知修辞学の観点から、1) 解釈多様性 (interpretive diversity)、2) 概念的適切性 (conceptual aptness)、3) 感情価 (emotive value) が隠喩表現の詩的度に影響を与えるとしている。⁽⁸⁾ 隠喩表現は解釈が多様なほど詩的度が高く(解釈多様性)、理解が困難であるほど詩的度も高くなり(概念的適切性)、感情価、つまり美しいと思える度合いに応じて詩的度が高くなる(感情価)というのが隠喩の詩的度の3要因とされている。

佐藤による直喩の「定義」と内海による（隠喩の）詩的度の基準は、ともに被喩辞と喩辞との間の異質性に立脚しているのは明らかである。本稿で考察対象とするのも、このように被喩辞と喩辞とが非類縁的に結びつけられ、解釈が多様で、理解が困難で、美しいと感ずることができる直喩表現である。

II 接尾辞 “(-)like” を含む語句のデータと考察

*Other Voices*は、Random House版（初版）で231頁の中編小説である。「～のような／～のように」と訳出可能なフレーズのバリエーションは実に豊かであり、“-wise”（e.g., “turtlewise” p. 18.）、“-ish”（e.g., “waspish-voiced woman” p. 21.）などの接尾辞を比喩標識に加えるとすれば、その数たるや気の遠くなるほどの分量である。もちろん“like”にも、例えば（“swamplike” p. 3.）のように、接尾辞“-like”の用法がある。

本節では、接尾辞“-like”を含む事例に注目したい。*Other Voices*には接尾辞“-like”を含む語句が48例確認できる。それらを品詞および用法別に分類すると、つぎの3とおりの区分が可能である。

①名詞を修飾する限定用法の形容詞（35例）

swamplike hollows（沼地のようなくぼ地 p. 3.）・tissue-like paper（ティッシュペーパーのような紙 p. 6.）・Godlike action（神わざとしか言いようのないほどの行為 p. 12.）・ape-like arms（サルのような腕 p. 22.）・antenna-like hair（アンテナのような一本の毛 p. 23.）・ladylike manners（淑女らしい作法 p. 27.）・barnlike structure（納屋を思わせる建物 p. 27.）・vine-like lattice（蔓のような格子 p. 31.）・birdlike manner（小鳥のような様子 p. 32.）・knifelike shaft（ナイフのような堅穴 p. 40.）・ladylike step（淑女のような歩み p. 42.）・gnat-like motes（ブヨのような塵 p. 43.）・maplike stains（地図のようなシミ p. 50.）・fist-like knot of flies（拳のようなハエの群れ p. 56.）・toylike accordion（おもちゃのようなアコーディオン p. 68.）・the arms of the black arrow-like daughter（黒い矢のような娘の腕 p. 73.）・gun-like finger（銃のような指 p. 79.）・necklace-like ornament（ネックレスのような装飾品 p. 95.）・shark-like cloud（サメのような雲 p. 98.）・coinlike profile（コインのような

横顔 p. 120.)・toylike dark glasses (おもちゃのような黒メガネ p. 123.)・plushlike moss (フラシ天のような苔 p. 125.)・limelike light (ライムのような光 p.125.)・a rattlesnake's cellophane-like sheddings (ガラガラヘビのセロファンのような抜け殻 p. 126.)・glasslike, smokelike clouds (ガラスのようで、煙のような雲 p. 129.)⁹⁾・faunlike creature (牧畜の神のような生き物 p. 138.)・Jesus-like glow (イエスのような輝き p. 151.)・ladylike lifting (淑女のような持ち上げ方 p. 169.)・seed-like eyes (種子のような目 p. 179.)・winglike hands (羽根のような手 p. 193.)・boatlike sleigh (ボートのような橇 p. 203.)・giraffe-like grandeur (キリンのような威厳 p. 213.)・arrow-like dignity (矢のような威厳 p. 213.)・eel-like slickness (ウナギのような滑り感 p. 220.)・lamplike eyes (ランプのような目 p. 226.)

②不完全自動詞 (“be”) の補語を導く叙述用法の形容詞 (3例)

trancelike (夢うつつの p. 38.)・dreamlike (夢見心地の p. 146.)・childlike (子供のように p. 227.)

③副詞 (10例)

[end this meeting] proper-like ([この会合を] きちんと [終える] p. 73.)・[smoke, ...] rising spire-like (尖塔のようにまっすぐと立ち昇る [煙] p. 109)・cracked whiplike (鞭のように響いた p. 111.)・whistled boylike (男の子のように口笛をふいた p. 129.)・blindlike blue looking eyes (視覚障害者のように青白い目 p. 159.) [Abruptly] businesslike ([突如] 事務的に p. 174.)・floating foglike (霧のように漂う p. 177.)・cellar-like dark (地下室のように暗い p. 179.)・glittering roselike (バラのように輝く p. 193.)・trash-paper scurrying animal-like (動物のように駆け抜ける紙屑 p. 193.)

[考察]

さて、①から順に考察する。①の「名詞を修飾する限定用法の形容詞」は、さらに(1)喩辞と被喩辞とが類似の関係にあり、喩辞が被喩辞の単なる形容であるもの (e.g., “swamplike hollows”), (2)喩辞の属性の一つが被喩辞の形容となっているも

の (e.g., “ape-like arms”), (3) 喩辞と被喩辞とが非類似 (異質) の関係にあるもの (e.g., “seed-like eyes”) に分類が可能である。

区分(1)~(3)ともに接尾辞“-like”を省いた際に、[喩辞≒被喩辞]となるものが(1) (e.g., swamp ≒ hollow), [喩辞≧被喩辞]となるものが(2)(e.g., ape ≧ arms)⁽¹⁰⁾、[喩辞≠被喩辞]となるものが(3) (e.g., seed ≠ eyes) と区別することが可能であろう。前節の直喩の定義に基づけば、一応の目安として、(1)に分類可能な事例を単なる形容として直喩とは見做さない、(2)は被喩辞を形容する喩辞の選択に作者の感性が多少関与しているために直喩と見做す、(3)は被喩辞を形容する喩辞の選択に作者の獨創性が大いに関与しているために直喩と見做すことができる。これらの区分を用いて名詞を修飾する限定用法の形容詞35例を分類すると以下のとおりである。但し、“glasslike, smokelike clouds”は(2)と(3)の両方に分類可能なため、下のリストには含めていない。⁽¹¹⁾ なお、後述のとおり、この区分は絶対的なものではない。

(1) 喩辞と被喩辞とが類似の関係にあるもの ([喩辞≒被喩辞]) 6例

swamplike hollows [swamp ≒ hollows] tissue-like paper [tissue ≒ paper]
barnlike structure [barn ≒ structure] necklace-like ornament [necklace ≒
ornament] limelike light [lime ≒ light] faunlike creature [faun ≒ creature]

(2) 喩辞の属性の一つが被喩辞の形容となっているもの ([喩辞≧被喩辞]) 10例

Godlike action [God ≧ action] ape-like arms [ape ≧ arms] ladylike manner
[lady ≧ manner] birdlike manner [bird ≧ manner] ladylike step [lady ≧
step] plushlike moss [plush ≧ moss] a rattlesnake’s cellophane-like sheddings
[cellophane ≧ sheddings] Jesus-like glow [Jesus ≧ glow] ladylike lifting [lady
≧ lifting] eel-like slickness [eel ≧ slickness]

(3) 喩辞と被喩辞とが非類似 (異質) の関係にあるもの ([喩辞≠被喩辞]) 18例

antenna-like hair [antenna ≠ hair] vine-like lattice [vine ≠ lattice] knifelike
shaft [knife ≠ shaft] gnat-like motes [gnat ≠ motes] maplike stains [map ≠
stain] fist-like knot of flies [fist ≠ knot] toylike accordion [toy ≠ accordion]

the arms of the black arrow-like daughter [arrow ≠ daughter] gun-like finger [gun ≠ finger] shark-like cloud [shark ≠ cloud] coinlike profile [coin ≠ profile] toylike dark glasses [toy ≠ (dark) glasses] seed-like eyes [seed ≠ eyes] winglike hands [wing ≠ hands] boatlike sleigh [boat ≠ sleigh] giraffe-like grandeur [giraffe ≠ grandeur] arrow-like dignity [arrow ≠ dignity] lamplike eyes [lamp ≠ eyes]

さて、比較（喩え）であるか直喩であるかの区別が、喩辞と被喩辞が類似の関係にあるか非類似（異質）の関係にあるかによるという前節の基準にしたがえば、(1)の6例は単なる比較（喩え）である。

また、(2)の10例のうち、“Godlike action”、“ladylike manner”、“ladylike step”、“Jesus-like glow”、“ladylike lifting”の5例は、たしかに喩辞の属性の一つが被喩辞の形容（[喩辞≧被喩辞]）になってはいるが、概ね、十分に理解可能な喩辞－被喩辞の関係にあり、直喩と見做すには獨創性を欠いている。一方、残る5例は被喩辞を形容する喩辞の選択に作者の感性が多少なりとも関与しているのは明らかであり、直喩であると言えよう。例えば、“plushlike moss”は、足の裏に感じる苔の柔らかさがフラシ天の滑らかさや柔らかさに喩えられているのだが、苔の柔らかさの感触を伝える喩辞はフラシ天以外にも数限りなく考えられるであろう。すなわち、“plush”を選択したことにカポージェの感性が反映されているわけである。“a rattlesnake’s cellophane-like sheddings”も同様である。ガラガラ蛇の抜け殻は幾ようにも喩えられるはずである。にもかかわらず、カポージェはそれをセロファンに喩えた。これもまた、カポージェの感性（獨創性）の表れである。

(3)はどうであろうか。18例すべてについて喩辞と被喩辞とが非類似（異質）の関係にあるのは明らかである。だが、このうち“toylike accordion”と“toylike dark glasses”は、到底、直喩と見做すことはできない。“toy”が「本物」に対する「おもちゃ（偽物）」の「安っぽさ」を表していることは、この単語の原義に備わった本来の意味であり、カポージェの獨創性とは無関係だからである。また、“maplike stains”、“gun-like finger”、“coinlike profile”、“boatlike sleigh”、“lamplike eyes”の5例は喩辞と被喩辞が確かに異なっているものの、喩辞と被喩辞とを結びつける、言

わば「第3の概念」が形状の類似であることが容易に判断できる。この意味において、これら5例を直喩と見做しうるか否かの判断は難しい。だが、例えば、“lamplike eyes”の場合、“eyes”の「丸さ」を形容する喩辞が数多く考えられる中で、作者は“lamp”を選択した。他の4例も同様の選択がなされている。この意味においては、これら5例は(2)の5例同様、直喩と捉えることが可能であろう。

以上のとおり、接尾辞“-like”を含む、名詞を修飾する限定用法の形容詞35例のうち「直喩」に該当する語句は21例と考えることができる。

②完全自動詞(“be”)の補語を導く叙述用法の形容詞3例はどうであろうか。“trancelike”(「夢うつつの」)、“dreamlike”(「夢見心地の」)、“childlike”(「子供のようで」)は、いずれも人物を主語とする文の補語として用いられており、それらの人物の「様子」を文どおりの意味で叙述している。そのために、これら3例は直喩と見做すことはできない。

最後に③である。③の10例は副詞であるために、接尾辞“-like”を伴う喩辞が別の名詞(被喩辞)を修飾しているわけではない。だが、例えば、“whistled boylike”(「男の子のように口笛をふいた」)から“boylike whistle”(「男の子のような口笛」)という名詞句を派生させることは可能であり、こうした操作を経たうえで、喩辞と被喩辞の関係性を吟味することは可能であろう。この操作により③を喩辞と被喩辞の関係に組み替えると次のようになる。

[end this meeting] proper-like → proper-like ending of this meeting

[smoke, ...] rising spire-like → spire-like rising [of the smoke]

cracked whiplike → whiplike crack / whistled boylike → boylike whistle

blindlike blue looking eyes → blindlike blueness of the eyes

[Abruptly] businesslike → businesslike abruptness

floating foglike → foglike float(ing) / cellar-like dark → cellar-like darkness

glittering roselike → roselike glitter

trash-paper scurrying animal-like → animal-like scurrying of the trash-paper

このうち、以下の3例は直喩と捉えることは難しいであろう。いずれも、動詞の単

なる修飾語句 (Modifier) にすぎず、美的効果とは無縁だからである。

[end this meeting] proper-like 「[この会合を] きちんと [終える]」

whistled boylike 「男の子のように口笛をふいた」

[Abruptly] businesslike 「[突如] 事務的に」

これに対し、以下の7例は、もとの副詞から形容詞への組み替えによって、喩辞と被喩辞の結びつきに作者独自の感性が多かれ少なかれ反映されており、直喩に該当すると見做しうる。

[smoke, ...] rising spire-like → spire-like rising [of the smoke]

cracked whiplike → whiplike crack

blindlike blue looking eyes → blindlike blueness of the eyes

floating foglike → foglike float(ing)

cellar-like dark → cellar-like darkness

glittering roselike → roselike glitter

trash-paper scurrying animal-like → animal-like scurrying of the trash-paper

“[smoke, ...] rising spire-like (→ spire-like rising [of the smoke])” は、遠景の煙突から立ち昇る煙がまっすぐなさまを表しているが、その様子を“spire”（「尖塔」）になぞらえたのは独創的である。“cracked whiplike (→ whiplike crack)”の主語は「銃声 (“the sound of bullet fire”）」である。「銃声が静けさに鞭うったように響き渡った」というのが文単位の意味である。「銃声」(被喩辞)と「鞭の音」(喩辞)との結びつきは意外かつ新鮮である。「パン」という前者の銃声は、「パシッ」という後者の音と異質ではありながらも、ともに一瞬のうちに張りつめた緊張感を作り出すという共通の効果を持つ。“blindlike blue looking eyes (→ blindlike blueness of the eyes)”は、登場人物の一人である100歳ほどのジーザス・フィーバー(Jesus Fever)の描写の一部である。視覚障害者の目が実際に青白く見えるかどうかは別として、目の機能を失った状態が生気を欠いて青白く見えるというイメージはつかみ

やすい。また、本稿の着眼点ではないが“*blindlike blue*…”が子音“b”の頭韻を踏んでいることも、このフレーズの直喩としての特徴である。“*floating foglike* (→ *foglike float(ing)*)”は、「森のなかに霧のように浮かぶもやのように白く霞む宮殿 (“a kind of mist-white palace floating foglike through the woods”)”というフレーズの中で用いられている。「もやのような白く霞む宮殿」をさらに「[森のなかに] 霧のように浮かぶ」というふうに分けて形容を重ねることで、より幻想的なイメージを醸し出している。また、“*floating foglike*”が子音“f”の頭韻を踏んでもいる。“*cellar-like dark* (→ *cellar-like darkness*)”は主人公ジョエル (Joel Knox) がアイダベル (Idabel) と二人で暗い森のなかを歩いている場面での記述である。辺りが漆黒の闇であることを、“*cellar*”(「地下室」=密閉空間)を喩辞に用いた強意的直喩である。本事例はまた、“*cellar-like dark*”が [a:(r)] 類韻を、“*cellar-like*”と“*dark*”が [k]の子音韻を踏んでいる点も興味深い。“*glittering roselike* (→ *roselike glitter*)”は、巡回ショーの小人芸人ウィステリア (Miss Wisteria) が被った王冠のガラス細工に観覧車のピンク色が反射して輝くさまを描写した一文で用いられており、ガラス細工の凹凸により、観察者ジョエル (=作家カポータ) にはその輝きがバラを想起させたのであろう。美しい表現である。“*trash-paper scurrying animal-like* (→ *animal-like scurrying of the trash-paper*)”は、突如、巡回ショーを襲った疾風に吹き飛ばされる紙屑の描写の一部である。不規則な風向きや風の強弱のために、紙屑があちらこちらへ気まぐれに吹き飛ばされるさまが、あたかも天敵に追いかけられている小動物の逃げ惑うさまになぞらえられており、絶妙な直喩表現である。

以上考察してきたとおり、接尾辞“-like”を含む全48例中、名詞を修飾する限定用法の形容詞21例と副詞7例の合計28例を直喩と見做すことができるであろう。

Ⅲ “like” (前置詞・接続詞) を含む語句のデータと考察

*Other Voices*には、前置詞・接続詞として用いられた“like”が315例確認できる。このうち前置詞297例、接続詞18例と、前置詞が94%以上を占めている。

まずは用例の少ない接続詞の“like”に注目したい。辞書や文法書によると、接続詞の“like”は「非標準」・「うちとけた言い方」とされており、⁽¹²⁾ 事実、*Other*

*Voices*の18例はすべて会話文（登場人物の発話）で用いられている。『小学館ランダムハウス英和大辞典』は接続詞の“like”を「非標準」としたうえで、次の2用法を掲げている⁽¹³⁾が、*Other Voices*の18例もこの2用法のいずれかに分類することが可能である。引用文の左側の数字1, 2は枠内の1, 2に対応している。

— *conj.* 《非標準》 1... と同じように、 のように (in the same way as, just as, as)
2 あたかも... のように、 まるで... みたいに (as if, as though)

- 1 “It don’t pay to treat Idabel like she was a human being, ...” (p. 34.)
- 1 “We were born twins, like I told you, ...” (p. 35.)
- 2 “That be thirteen year ago, and now it look to me like Papadaddy gonna outlive Methusaleh.” (p. 57.)
- 1 “... and you would like my dad as he knows all about airplanes like you do.” (p. 91.)
- 1 “...: like Mama says, it’s better to let Idabel troop around in what-have-you cause ...” (p. 101.)
- 1 “She thinks when Papa dies he’ll leave her the place to do with like she pleases.” (p. 102.)
- 1 “You got such pretty fine molasses hair seems like we oughta could sell it to them wigmakers.” (p. 115.)
- 2 “...you’re fixed up like it was Sunday.” (p. 124.)
- 1 “..., and her mama worked for old Mrs Skully like Zoo does now.” (p. 126.)
- 1 “That’s not like what I was saying,” said Joel, ... (p. 130)
- 1 “I never think like I’m a girl; ...” (p. 132.)
- 1 “You know, I bet I could sing in Vaudeville shows and make a whole lot of money, enough money to buy you a fur coat, Zoo, and dresses like they show in the Sunday papers.” (p. 160.)
- 1 “Do seem to me like you’d be glad on my account, us bein friends and all.”(p. 165.)

1 “Still, does seem like she could’ve stayed to fix breakfast.” (p. 167.)

2 “... except maybe look like it was alive.” (p. 169.)

1 “But like I told you, ...” (p. 173.)

2 “..., you believe like we’re brothers, ...” (p. 174.)

1 “..., an it seem like I ain’t come no ways, ...” (p. 214.)

接続詞 “like” の第 1 の用法はその意味から判断して直喩を形成する比喩標識と見做すことはできないが、第 2 の用法は直喩の比喩標識 “as if(/ as though)” と同義であるために、直喩表現を形成する可能性がある。『小学館ランダムハウス英和大辞典』には第 2 の用法の例文として次の 4 文が記載されている。⁽¹⁴⁾

(2-a) He acted like he was afraid.

「まるでこわがっているみたいにふるまった。」

(2-b) I was trembling like I was coming down with the flu.

「流感のかかりかけみたいにふるふるふるえた。」

(2-c) I feel like I’ve been locked up in here all my life.

「ずっとここに閉じ込められていたみたいな感じだ。」

(2-d) It rained like the skies were falling.

「空が落ちてきそうにどしゃ降りだった。」

(2-a)～(2-d)の文中の “like” 以下は、すべて主節の自動詞が表わす意味を喩えによって表現している。このうち、(2-a)・(2-b)・(2-c)の喩えは、現実に起こり得る。何かこわがったり、流感にかかりかけたり、一か所に閉じ込められたりする経験は珍しくはなく、類似もしくは同様の実体験から読者にはそのイメージが伝わりやすい。それに対して、(2-d)は非現実的な喩えであり、あくまで想像力を介してのみ理解可能である。そしてそのぶんだけ、インパクトは強く、印象的である。いわゆる、「強意的直喩」(Intensifying Simile)の部類である。

さて、*Other Voices*の18例のうち第2の用法に分類可能な4例はどうであろうか。文意から判断する限りでは、(2-d)に該当するのは次の1例のみである。ただし、本

事例は「誇張法」(Hyperbole)によるユーモアの創出は認められても、詩的な雰囲気醸し出しているとは言い難い。

(“Papadaddy was past ninety then, and they say he ain’t long for this world, so I came.) That be thirteen year ago, and now it look to me *like* Papadaddy gonna outlive Methusaleh.”)

「(おとうちゃんは当時90歳をすぎていたわ。もう長くはないという噂だったから、わたし、やってきたの。)それが13年前の話。今では、おとうちゃん、メトシエラよりも長生きしそうだわ。」

つぎに前置詞“like”の297例の分類と考察である。

297例のなかには、“like that” (p. 8.)、 “like this” (p. 51.)、 “like him” (p. 72.)などのおよそ直喩とはほど遠い副詞句・形容詞句を形成するフレーズが57例含まれている。

この57例を除外した240例のうち、“seem like”、“look like”、“feel like”、“sound like”などの、不完全自動詞の補語を導く“like”の用例が21例確認できる。この21例のうち、(3-a)のように被喩辞と喩辞とが類似の関係にある単なる喩えの事例が15例、(3-b)のように被喩辞と喩辞とが非類似の関係にある直喩の事例が6例となっている。

(3-a) ..., the light sheet covering him felt *like* a wool blanket. (p. 40.)

「…彼を覆う軽いシートはウールの毛布のようだった。」

※喩辞 (“a wool blanket”) と被喩辞 (“the light sheet”) は類似の関係。

(3-b) She looked *like* a kind of wax machine, ... (p. 120.)

「彼女はまるで蠟細工の機械のようだった。」

※喩辞 (“wax machine”) と被喩辞 (“she”) は非類似の関係 (=直喩)。

さらに、240例からこれら21例を除いた219例のうち、be動詞(不完全自動詞)の補語を導く“like”の用例が49例確認できる。この49例のうち、(4-a)のように被喩辞

と喩辞とが類似の関係にある単なる喩えの事例が22例、(4-b)のように被喩辞と喩辞とが非類似の関係にある直喩の事例が27例となっている。

(4-a) ..., she would fix it so he could go away to a school where everybody was *like* everybody else. (pp. 110-111.)

「…彼女は誰もが他の誰もと同じような学校へ彼を行かしてくれるお膳立てをしてくれるだろう。」

※喩辞 (“everybody else”) と被喩辞 (“everybody”) は類似の関係 (単なる喩え)。

(4-b) ..., and in the sky the sun was *like* a lump of ice. (p. 152.)

「…そして天空の太陽は氷の塊のようだった。」

※喩辞 (“a lump of ice”) と被喩辞 (“the sun”) は非類似の関係 (=直喩)。

最後に219例のうち、上記の49例を差し引いた残り170例に注目したい。これらを(5-a)のように、被喩辞と喩辞とが類似 (単なる喩え) の関係にあるか、また、非類似の関係にある場合、(5-b)のように、それがカポーティの創作によるものか否かを基準にして分類すると、単なる喩え (類似) の例が38事例、直喩 (非類似) に該当する例が132事例と、直喩が圧倒的に多い。

(5-a) Somewhere in a school textbook of Joel’s was a statement contending that the earth at one time was probably a white hot sphere, *like* the sun; ... (p. 64.)

「ジョエルの学校の教科書のどこかに、かつて地球は太陽のように白くて熱い球体だったに違いないという記述があった。」

※喩辞 (“the sun”) と被喩辞 (“the earth”) は類似の関係 (単なる喩え)。

(5-b) A sea of deepening green spread the sky *like* some queer wine, ... ⁽¹⁵⁾ (p. 27.)

「深まりゆく緑の海が、不思議なワインのように空に広がった…。」

※喩辞 (“some queer wine”) と被喩辞 (“A sea of deepening green”) は非類似の関係 (=直喩)。

以上の分類に前節でみた接尾辞 “-like” を含む語句48例の分類を加えて一覧表にまとめたものが(表1)である。接尾辞 “-like” を用いた直喩表現28事例に比喩標識 “like” を用いた直喩表現166事例を加えると、その数は194事例にもなる。 *Other Voices* が231頁の中編小説であることを考慮に入ると、“(-)like” による直喩表現の使用頻度は高く、数字で見ると、比喩標識 “(-)like” は *Other Voices* の詩的雰囲気生成に深く関与していると言えるであろう。

(表1) 比喩標識 “(-)like” の分類

	品 詞	用 法	単なる喩え (類似)	直喩
接尾辞(-)like	形容詞 (限定用法)		14	21
	形容詞 (叙述用法)		3	
	副詞		3	7
小 計			20	28
like	接続詞		17	1
	前置詞	“like this” など	57	
		“seem like” など	15	6
		“be like”	22	27
		その他	38	132
小 計			149	166
合 計			169	194

では、これら166例の直喩表現はいかなる詩的効果をあげているのであろうか。紙面の都合上、本節では二つの特徴を指摘するにとどめたい。

Other Voices は、現実と非現実との境界が曖昧な、幻想的な雰囲気を特徴とするゴシック仕立ての物語である。13歳の少年ジョエルによる父親探しとその挫折を主たるテーマとするこの作品では、人物や事物が、まるで表面の波打った鏡に映しだされた鏡像であるかのような歪んだイメージで描き出されている。登場人物のほぼ全員が人間離れたグロテスクな特徴を付与されている。この奇怪さ・歪みのイメー

ジは、孤児意識に彩られたジョエルの歪んだ現実感覚の反映に他ならない。作者カポーティはジョエルのこうした現実感覚の歪みを様々な意匠を凝らして表現している。登場人物の「目」に関する直喩表現もその一つである。

(6-a)のエイミーはジョエルの継母にあたる。(6-b)のランドルフは年の離れたジョエルの従兄弟である。ともにジョエルの父サンソムの住むスカリーズ・ランディング (Skully's Landing) の住人である。(6-c) と(6-d)のズーは、ジョエルが唯一頼りにするランディングの家政婦の黒人娘である。(6-e) のサンソムはランドルフの銃弾を浴びて寝たきり状態のジョエルの実父である。つまり、これら4者はみな、ジョエルにとって身近な人物なのだが、彼らの目はいずれも「モノ」に喩えられている。エイミーの目は「ほっそりとした顔の柔らかさに埋め込まれた2粒のレーズン」(6-a)に、ランドルフの目は「スカイブルーの大理石」(6-b)に、ズーの目は「野生のブドウ」(6-c)や「サテン(縞子)」(6-d)に、サンソムの目は「めったに閉じられることのない夏の窓」(6-e)に喩えられているのである。

その一方で、「モノ」が「目」に喩えられた直喩表現も確認できる。(6-f)では、ジョエルの足元に落ちている「5セント白銅貨と1セント銅貨」が、ジョエルを見上げる「不揃いな目」に、(6-g)では、「月」が、窓から覗き込む「盗賊の目」に擬人化されている。

(6-a) She [Amy] was slight, and fragile-boned, and her eyes were *like* two raisins embedded in the softness of her narrow face. (p. 42.)

(6-b) ..., and his[Randolph's] wide-set, womanly eyes were *like* sky-blue marbles. (p. 79.)

(6-c) With a fingertip she [Zoo] shined her gold tooth to a brighter luster while her slanted eyes scrutinized Joel; these eyes were *like* wild foxgrapes, or two discs of black porcelain, and they looked out intelligently from their almond slits. (p. 57.)

(6-d) "HOLD still," said Zoo, her eyes *like* satin in the kitchen lamplight. (p. 115)

(6-e) All pleasure, all pain, he[Mr Sansom] communicated with his eyes, and

his eyes, *like* windows in summer, were seldom shut, always open and staring, even in sleep. (p. 125.)

(6-f) Then, in the dust at his feet, torn from the toilet-paper wrapping, he[Joel] saw his coins, a nickel and a penny sparkling up at him *like* uneven eyes. (p. 111.)

(6-g) ...; and sometimes, waking with the moon watching at the window *like* a bandit's eye, he[Joel] could see Randolph's asthmatic cigarette still pulsing in the dark: ... (p. 208.)

カポージェティはこのように「目」を「モノ」に、「モノ」を「目」に喩える直喩を用いることで、読者の詩的感性を刺激しつつ、ジョエルの歪んだ現実感覚を表現しているように思われる。

また、166例の直喩表現を鳥瞰すると、もう一つ、顕著な特徴に気がつく。それは多くの事例において押韻を意識した直喩の創造が試みられている点である。直喩はそれ自体が詩的雰囲気への創出に関係しているのであるが、直喩に押韻が組み込まれることで、リズム感が付与され詩的効果が一層高まるであろう。*Other Voices*にはこの部類に相当するフレーズが以下のとおり、12事例確認できる。

"like the <i>beat</i> of <i>bird</i> wings" (p. 40.)	"like the crystal <i>flex</i> of a jellyfish" (p. 63.)
"like <i>surf</i> on the <i>sky's</i> <i>shore</i> " (p. 69.) ⁽¹⁶⁾	"like a <i>ball</i> of <i>burnished</i> metal" (p. 70.)
"like a <i>rock</i> <i>rattling</i> in the chest" (p. 71.)	"like a <i>round</i> , <i>ripe</i> peach" (p. 81.)
"like <i>faded</i> <i>gold</i> <i>flags</i> " (p. 90.)	"like <i>shooting</i> sparks" (p. 110.)
"like the <i>springs</i> of a <i>sprung</i> watch" (p. 119.)	"like <i>many</i> heavy <i>men</i> " (p. 121.)
"like a <i>bird</i> in search of <i>food</i> " (p. 134.)	"like a frightening <i>black</i> <i>bird</i> ." (p. 158.)

IV 事例の考察：事例(1) — 事例(3)

本節では *Other Voices* より直喩を含む3つの描写を事例として取り上げ、その詩的効果を考察する。それぞれの事例で引用文のあとに拙訳を付したうえで、考察を試みる。なお、“like”をはじめ、その他の比喩標識を含む直喩表現や隠喩に該当するフレーズには引用文中に修飾(下線・イタリック)を施している。

事例(1)

Joel didn't hear the rest, for he suddenly noticed Idabel had stopped trailing the wagon. She was far back and running, running *like a pale animal* through *the lake of weeds* lining the wayside towards *a flowering island of dogwood* that bloomed lividly some distance off *like seashore form* on a black beach. (p. 35.)

「ジョエルは [フロラベルの] 話の続きを聞いていなかった。というのも、アイダベルがもう馬車のあとをついてきていないことに、ふと気づいたからだ。彼女は遙か後方を駆けていた。青白い獣のように駆けていた。道端に生える雑草の湖を抜け、少し先の、黒い浜辺に打ち寄せる泡のように青黒く咲くハナミズキの島に向かって駆けていたのだ。」

[考察]

ジョエルはヌーン・シティー (Noon City) を経由して、父の住むスカリーズ・ランディングへ向かう。ヌーン・シティーには年老いた黒人の使者ジーザス・フィーバー (Jesus Fever) が馬車でジョエルを迎えに来ており、日暮れとともに、二人はランディングを目指す。途中、森のなかで家路を急ぐフロラベル (Florabel) とアイダベル (Idabel) の双子の姉妹が現れる。フロラベルはジョエルの隣に座り、おしゃべりを続ける。上掲の引用文は、馬車の後方を駆けていたお転婆娘アイダベルの動きが、暗闇のなかで幽かに浮かび上がるさまを描写した場面 (第1章) からの抜粋である。

夕闇はすべてのものを影絵に変える。遙か後方を駆けるアイダベルは薄暗がりに溶け込んで「青白い獣」へと姿を変え、「湖」と化した雑草の平野を駆け抜ける。「湖」のほとりに、おそらくは白かピンクの花を咲かせたハナミズキの木立が闇を背景にしてその部分だけぼんやりと「小島」のように浮かび上がる。そして、ハナミズキの白かピンクの花びらは、雑草の湖の岸辺で碎ける「泡」と化す。

実に卓抜な詩的描写である。この詩的な趣きは、むろん、二つの直喩 (“*like a pale animal*”、 “*like seashore form*”) と二つの隠喩 (“*the lake of weeds*”、 “*a flowering island of dogwood*”) によって醸し出されている。また、直喩 “*like a pale animal*” と隠喩 “*the lake of weeds*” の組合せによるフレーズには [1] の子音韻 (*like*,

pa/e, anima/, lake) と [ei] の類韻 (pale, lake) が含まれており、押韻上のこの工夫により、引用文にリズムが生じ、詩的雰囲気さをさらに高める要因となっている。この直喩と隠喩と押韻の効果は、上の引用文を直喩と隠喩を排した下の平常文と比較すると歴然とする。

Joel didn't hear the rest, for he suddenly noticed Idabel had stopped trailing the wagon. She was far back and running through the field of weeds lining the wayside towards a flowering dogwood that bloomed vividly some distance off.

Other Voices が、現実と非現実との境界が曖昧な、幻想的な雰囲気を特徴とするゴシック仕立ての物語であることは前節の最後で述べたとおりである。「夕闇」が現実と非現実との境界を曖昧にする時空的象徴であることは言うまでもない。本事例において、カポーティは「夕闇」のこうした象徴性を利用しつつ、直喩と隠喩の比喩表現を用いることによって、詩的で幻想的な雰囲気の創出に成功している。

事例(2)

High in chinaberry towers the wind moved *swift as a river*, the *frenzied leaves*, caught in its current, frothed *like surf on the sky's shore*. And slowly the land came to seem *as though it were submerged in dark deep water*. The fern undulated *like sea-floor plants*, the cabin loomed *mysterious as a sunken galleon bulk*, and Zoo, with her fluid, insinuating grace, could only be, Joel thought, the mermaid bride of an old drowned pirate. (pp. 69-70.)

「センダンの木の高い梢の辺りでは、風が川のように速く流れ、荒れ狂ったような木の葉は、その流れに巻き込まれ、空の浜辺に打ち寄せる波のように泡立った。また、陸地が暗く深い海底にゆっくりと沈んでいくかのように思われた。シダは海藻のよううねり、小屋は沈没したガリオン船のように不気味にぼんやりと現われた。そして、ジョエルには、流れるような、意味ありげな気品を帯びたズーが、その昔、溺死した海賊の人魚の花嫁にしか思えなかった。」

[考察]

本事例は *Other Voices* 第3章からの抜粋である。ランディングに到着したジョエルは、父サンソムと会わせてもらえないまま、数日を過ごす。そんなある日、彼はズーとその祖父ジーザス・フィーバーの屋外での祈祷の儀式に立ち会うことになる。祈祷の最中、夏の嵐を思わせる暗雲を伴う疾風が吹きはじめ、センダンの木の梢を激しく揺さぶる。

もちろん、ジョエルは地上から頭上のざわめく枝葉を見上げているのであるが、梢を揺らす疾風が「川」になぞらえられたことに端を発し、続々とイメージの拡張が促されていく。「風にざわめく梢の葉」は、見上げるジョエルの目に「空の河岸に打ち寄せる波」の泡立ちのように感じられる。この錯覚は、同時に、ジョエルが立っている地面（陸地）が「まるで暗く深い海底に沈んでいくかのような」新たな錯覚を誘発し、地面から生え出る〈シダ＝海藻〉、〈小屋＝沈没したガリオン船〉、〈ズー＝溺死した海賊の人魚の花嫁〉という一連のイメージを引き起こす。

こうしたイメージの拡張が、詩的想像力により増幅されていることは言うまでもない。そして、この詩的想像力を刺激する媒体が本事例に用いられた二つの強意的直喩（“*swift as a river*” と “*mysterious as a sunken galleon hulk*”）、隠喩（“*frenzied leaves*”）、比喩指標 “like” によって導かれる二つの直喩表現（“*like surf on the sky’s shore*” と “*like sea-floor plants*”）、比喩指標 “as though” によって導かれる直喩表現（“*as though it were submerged in dark deep water*”）であることは明らかである。なお、直喩の “like surf on the sky’s shore” が [s] の子音韻を踏んでいることは、前節の最後に指摘したとおりである。

事例(3)

Deep in the hollow, dark syrup crusted the bark of vine-roped sweetgums; *like pale apple leaves* green witch butterflies sank and rose there and there; a breezy lane of trumpet lilies (Saints and Heroes, these alone, or so old folks said, could hear their mythical flourish) beckoned *like hands lace-gloved* and ghostly. Idabel kept waving her arms, for the mosquitoes were fierce: everywhere, *like scraps of a huge shattered mirror*, mosquito pools of marsh

water gleamed and broke in Henry's jogging path. (pp. 175-176.)

「谷間の奥深いところでは、黒い糖蜜が蔓の巻きついたモミジバフウの樹皮に固まりついていた。青ざめたリンゴの葉のように、緑色の蛾が、あちらこちらで浮きつ沈みつしていた。風に揺れるテッポウユリの列が（聖者や英雄にだけ、テッポウユリの奏でる神話の世界の楽句が聞こえるのだと老人たちは語るのであるが）レースの手袋をはめ、亡霊のように手招きした。アイダベルは両腕を振り回し続けた。蚊が執拗にまとわりついてきたからだ。至るところで割れた鏡の大きな破片のように、蚊のいる沼の水溜りが光り、とぼとぼ歩くヘンリーの足元で壊れた。」

[考察]

家出をしたアイダベルは、愛犬のヘンリー (Henry) とともにランディングを訪れ、ジョエルを巡回ショー見物に誘う。ジョエルは隠遁者リトル・サンシャイン (Little Sunshine) にお守りを作ってもらう約束をしていたことを思い出し、彼の住むクラウド・ホテル (Cloud Hotel) に立ち寄る提案をする。上掲の引用文は、クラウド・ホテルを目指す途中の谷間での一場面 (第10章) からの抜粋である。引用文中の直喩を考察するまえに、クラウド・ホテルの「過去」(第5章) に触れておく必要がある。

クラウド・ホテルは、かつて、スカリーズ家の親戚が営む人気のホテルだった。地下水の湧き出るクラウド湖畔に立つこのホテルでは、1893年、ジョエルの年頃の少年が100フィートの木の上から湖に飛び込み、頭を割って死んでしまう事件が起こった。その後、湖に泳ぎ出たギャンブラーが戻って来ないという第二の悲劇が起こって以降、湖では不吉な出来事が連続し、ホテルの客足は途絶えてしまった。湖は沼地と化し、「溺れ池 (“Drownin Pond”）」(p. 100.) と呼ばれるようになった。廃墟となったクラウド・ホテルに留まったのは、かつてこのホテルで馬丁を務めていたリトル・サンシャインだけだった。

つまり、ジョエルとアイダベルは、言わば、「呪われた死の館」に向かっていたわけである。彼らがさしかかった「谷間の奥深いところ」は、さしずめ、「冥界」への入口であった。読者にはそのことが三つの直喩によって巧みに伝えられている。

まずは最初の直喩 (“*like pale apple leaves*”) である。喩辞「青ざめたリンゴの葉 (“pale

apple leaves”）」は、被喩辞「緑色の蛾（“green witch butterflies”）」の羽根の喩えであることはほぼ間違いない。だが、「緑色の蛾」の羽根が「リンゴの葉」であることに特別の意味が込められているかどうかは疑問である。カポーティが言葉の音韻的側面に敏感で、音遊びや言葉遊びに関心を寄せる作家であることは前稿で確認したとおりであるが、本事例でも同様の工夫がなされていると考えることができよう。すなわち、“pale”と“apple”がともに“-le”の子音韻を踏んでいること、また、“pale”のアルファベットを入れ替えると“apple”を連想させる組合せが可能であることが明らかである。

このように考えてくると、“like pale apple leaves”の意味上の重要性が“apple leaves”ではなく、“pale leaves”に置かれていることがわかる。つまり、作者は、リンゴの緑の葉が瑞々しさを失い、しなびた様子を「青ざめた（“pale”）」と形容しているのであるが、瑞々しさを保持した状態を仮に「生」と捉えたとすれば、しなびて青ざめた状態は「死」のイメージに繋がるであろう。こうして、喩辞“pale apple leaves”によって被喩辞“green witch butterflies”は「死」のイメージを付与されることになる。ちなみに、読者は、この「緑色の蛾」が「あちらこちらで浮きつ沈みつする」という述部の叙述に接したとたん、クラウド・ホテルの「溺れ池」の水中で目撃された少年とギャンプラーの亡霊（第5章）を想起するであろう。「溺れ池」では水中から伸びる手がボートをひっくり返そうとしたり、泳いでいる人の両脚に絡みついたりしたのだが、「二人の長い緑色の髪は、海藻のようにもつれ合っていた」（p. 100.）との目撃情報と、「あちらこちらで浮きつ沈みつする緑色の蛾」が不気味に呼応し合うからである。⁽¹⁷⁾

二つ目の直喩（“like hands lace-gloved”）もまた「死」のイメージと深く結びついている。「テッポウユリ」（被喩辞）と「レースの手袋をはめた手」（喩辞）は、「白」や「優雅さ」のイメージを共有しているが、その一方で、「風に揺れるテッポウユリの列」が「亡霊のように手招きした」と叙述されることで、「白」や「優雅さ」のイメージは、たちまち「死」のイメージへと一変する。

三つ目の直喩（“like scraps of a huge shattered mirror”）は、文字どおりには、蚊の水溜りの水面が鏡のように何かを反射し輝いて見えるさまを描写している。同じような水溜りがあちこちに点在している様子を伝えるために、作者は「割れた鏡の破片」と表現しているのであるが、「割れた鏡（“shattered mirror”）」は同時に「不吉さ」のイメージを喚起する。この「不吉さ」は即座に「死」と結びつくのではない。

だが、「割れた鏡」と喩えられた「蚊のいる沼の水溜り (“mosquito pools of marsh water”）」から、「今や、川から流れ込む泥水によって不吉な色に変わってしまった (“... old-creek-slime, ...had dyed the water an evil color; ...”）」(p. 100.) という「溺れ池」を想起するとき、読者は、この直喩にも「死」の気配を感じ取るのである。

以上、本節では複数の直喩、強意的直喩、隠喩などの比喩表現を含む3事例をとおして、直喩の詩的効果を考察した。いずれの事例ともに、ある描写(場面)の雰囲気をもより効果的に演出するために、一つの比喩がまた別の比喩と絶妙な関連を保ちつつ、全体として、より詩的度の高い描写を実現している。また、一部の直喩には、押韻の工夫も施されており、音韻上の詩的効果も確認できた。

結び

カポーティ小説の詩的雰囲気は、いかにして作り出されているか。筆者は本稿で、比喩というレトリックが散文に詩的な雰囲気をもたらす要因の一つであるとの仮説(第I節)を基に、カポーティの処女中編小説 *Other Voices, Other Rooms* において、比喩標識“()like”を含む直喩がどれほど、また、どのように使用され、そしていかなる詩的効果をあげているかに注目した。その結果、接尾辞“-like”を含む語句48例中、28例が直喩と見做しうることを確認した(第II節)。また、前置詞及び接続詞の用法の“like”を含む315例については、およそ半数にあたる166例が直喩に該当し、その一部は *Other Voices* の支配的トーンである「現実感覚の歪み」を伝える重要な役割を担っていること、併せて、一部の直喩は押韻の工夫が施されていることにより、これらが詩的雰囲気の創出の要因であることが明らかとなった(第III節)。加えて、場面場面の描写に際し、カポーティは直喩や隠喩や押韻など複数のレトリックを集中させつつ、より一層、詩的度の高い場面描写を実現しているということ、三つの事例(場面)の考察をとおして明らかにすることができた(第IV節)。

比喩標識“like”を含む194もの直喩表現の事例は、前稿で論じた韻律の詩的効果と相まって、カポーティ小説の詩的雰囲気を高める要因の一つであることは明らかである。同じく、直喩表現を形成するその他の比喩標識“(as ~) as”や“as if / as though”)”を含む語句や隠喩などの詩的効果については、次稿以降の主題として論じることになる。

注

- (1) 大園弘「カポーティ小説の詩的特質(1)—韻律効果の考察—」『教養研究』九州国際大学教養学会 第22巻第1号 (2017年7月), pp. 1-45. 参照。
- (2) 被喩辞と喩辞とを結ぶ「～のような」に類する指標を中村明は「比喩標識」と名づけている。筆者もこの用語にしたがった。中村明『比喩表現の理論と分析』東京：秀英出版, 1997年, pp. 182-186. 参照。なお、「被喩辞」と「喩辞」には「被喩詞」と「喩詞」という言い方もあるが、本稿では前者の表現を用いている。
- (3) Leech, G. N., & Short, M. H. 『小説の文体—英米小説への言語学的アプローチ』(石川慎一郎・瀬良晴子・廣野由美子訳) 東京：研究社, 2003年. (原書名: *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, London: Longman, 1981) p. 4.
- (4) Lakoff, G., & Turner, M. 『詩と認知』(大堀俊夫訳) 東京：紀伊國屋書店, 1994年. (原書名: *More Than Cool Reason—A Field Guide to Poetic Metaphor*, Chicago: The University of Chicago, 1989) xi.
- (5) 佐藤信夫『レトリック感覚』東京：講談社学術文庫, 1992年, p. 90. 参照。
- (6) 同, p. 96. 参照。
- (7) Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Random House, 1948, p. 97. 以下、テキストはこの版を用いる。引用の際には、引用文のあとに括弧を付し、ページ数のみ記す。
- (8) 内海彰「隠喩と直喩、どちらが詩的か?」『ことば工学会』Vol. 21 (2005年11月) pp. 1-8. 参照。
- (9) “glasslike, smokelike clouds”は“glasslike”と“smokelike”の二つを含むフレーズであるが、本稿では1例と見做している。
- (10) “ape” (サル) の属性は、賢さ、毛むくじゃら、長い手など多様である。“ape-like arms”というフレーズでは、喩辞 (“ape”) の様々な属性の中から、被喩辞 (“arms”) によって「長さ」の概念のみが抽出されている。
- (11) “glasslike, smokelike clouds”の“glasslike clouds”は(3) [glass≠clouds]に、“smokelike clouds”は(2) [smoke≧clouds]に分類できるであろう。
- (12) たとえば、『小学館ランダムハウス英和大辞典』の“like”の項目では接続詞としての“like”が《非標準》と表記されている。小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』東京：小学館, 1973年, p. 1488. また、『現代英語文法—コミュニケーション編』では、接続詞の“like”が「うちとけた言い方」とされている。Leech, G.N., & Svartvik, J. 『現代英語文法—コミュニケーション編』(池上恵子訳) 東京：紀伊國屋書店, 1998年. (原書名: *A Communicative Grammar of English*, London: Longman, 1994) p. 515.

- (13) 『小学館ランダムハウス英和大辞典』、p. 1488.
- (14) 同、p. 1488.
- (15) “A sea of deepening green spread the sky like some queer wine, ...” は、子音 “s” の頭韻 (sea, spread, sky, some) と [i:] の類韻 (sea, deepening, green) を踏んでいる点でも興味深い。
- (16) “shore” は [ʃ] の発音であるため、厳密には他の単語群とは区別する必要があるだろうが、ここではリーチにならない、これらの単語も子音 “s” による頭韻に含んでいる。なお、リーチは “sun shone smoothly” というフレーズの三つの “s” を子音の反復とみなしている。Leech 『小説の文体—英米小説への言語学的アプローチ』 p. 23.
- (17) *Other Voices, Other Rooms*には “green” もしくは “green” を含む語句が38回使用されている。「不吉さ」のイメージを伴う “green” の用法も少なくない。“... luminous green logs that shine under the dark marsh water like drowned corpses; ...” (p. 3.) “...: she had the eyes of a fiend, the lady did, wild witch-eyes, cold and green as the bottom of the North Pole sea; ...” (p. 81) など。

参考文献

- ・大園弘「カポーティ小説の詩的特質(1)—韻律効果の考察—」『教養研究』九州国際大学教養学会 第22巻第1号 (2017年7月)
- ・内海彰「隠喩と直喩、どちらが詩的か?」『ことば工学研究会』Vol. 21. (2005年11月)
- ・佐藤信夫『レトリック感覚』東京：講談社学術文庫, 1992年.
- ・小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会編『小学館ランダムハウス英和大辞典』東京：小学館, 1973年.
- ・中村明『比喩表現の理論と分析』東京：秀英出版, 1997年.
- ・Lakoff, G., & Turner, M.『詩と認知』(大堀俊夫訳) 東京：紀伊國屋書店, 1994年. (原書名: *More Than Cool Reason—A Field Guide to Poetic Metaphor*, Chicago: The University of Chicago, 1989)
- ・Leech, G. N., & Short, M. H.『小説の文体—英米小説への言語学的アプローチ』(石川慎一郎・瀬良晴子・廣野由美子訳) 東京：研究社, 2003年. (原書名: *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, London: Longman, 1981)
- ・Leech, G.N., & Svartvik, J.『現代英語文法—コミュニケーション編』(池上恵子訳) 東京：紀伊國屋書店, 1998年. (原書名: *A Communicative Grammar of English*, London: Longman, 1994)
- ・Capote, Truman. *Other Voices, Other Rooms*. New York: Random House, 1948.